第六章　幕末・維新期の小倉藩

第一節　開国と攘夷決行

一　開　国

ペリーの来航　江戸時代の特徴の一つに鎖国がある。鎖国は寛永十六年（一六三九）、ポルトガル船の来航を禁止してから始まった。海で囲まれた日本は、古くから大陸との交易が栄え、特に瀬戸内海は海運が盛んであった。そして、江戸時代に入ると、西廻り・東廻り海運や大坂と江戸を結ぶ南海路といわれる外海の海運業が発達した。享保期（十八世紀初め）には中国船（唐船）による密貿易が玄界灘海域で多くなった。そこで福岡・小倉・長州の三藩が協同して追い払う役割が生じた。これを「唐船打ち払い」という。このような密貿易は見方を変えると、経済活動が盛んになってきたことを意味する。大陸から外海を通ってやってくることに目を奪われ、当然予期せずに外国へ渡ってしまう事態に陥った者たちがいたことは見落としがちであるが、江戸時代には多くの「漂流」があった。

嘉永六年（一八五三）、ペリーが軍艦四隻を率いて浦賀に来航し、アメリカ大統領の国書を提出して開国を要求した（写真5―25参照）。幕府は対策のないまま、その国書を受け取って回答を翌年にすると約束して退去させた。同じ年七月には、ロシアの使節プゥチャーチンも長崎に来て開国を要求した。「癸丑以来未曾有ノ国難」（王政復古の大号令）のはじまりである。癸丑（きちゅう）とは嘉永六年（一八五三）のアメリカの使節ペリーの来航をいい、それ以降大変な時代がはじまったという意味である。ロシア船が安永七年（一七七八）に蝦夷地の厚岸（あっけし）（北海道厚岸郡厚岸町）に来航したのが最も早い例である。ついで寛政四年（一七九二）ラクスマンが同地根室（現北海道根室市）に現れた。そして文化五年（一八〇八）には、イギリス船がオランダ船を求めて長崎に入港し、乱暴を働くという出来事が生じた（フェートン号事件という）。また、天保八年（一八三七）、尾張の国生まれの漂流民（『維新史』第一巻）の返還と通商を求めてきたアメリカの商船モリソ

写真５―25　ペリー上陸記念碑

ン号が浦賀（現神奈川県横須賀市）に現れたが、幕府はこれを撃退した。

ペリーが退去したのち、老中の阿部正弘はまず朝廷に報告し、諸大名そのほかに意見を聞く諮問政策をとった。今までの幕府政治とは違ったやり方で臨んだのである。この諮問に応じた回答は、大名から二五〇通、幕臣からは四二三通、諸藩の藩士からは一五通、学者からは二二通、庶民からも九通あったとされている。そのため、これ以後「処士横議」といわれるさまざまな階層の人々が政治的意見をほしいままにする風潮が生じた。その一方で、幕府は人材の登用を図り、国防の充実と江戸湾には台場（砲台）を築き、諸藩に沿岸の警固を命じた。

鎖国から開国

翌年の一月、ペリーは軍艦七隻を率いて再び来航し、強硬に条約の締結を迫った。幕府はやむなく日米和親条約を結び、下田と箱館の二港を開き、領事の駐在を認めた。続いてイギリス・ロシア・オランダとも条約を結んだ。こうして二〇〇年以上続いた鎖国政策は崩壊した。

このペリーの再来航に際して、幕府は神奈川宿のはずれ横浜において応接した。このとき、幕府は陸上の警固を小倉藩と松代藩に命じ、海上を鳥取藩に命じた。実際の警護は、応接所を境にして西側（海岸に向かって左側）を小倉藩が、東側を松代藩が担当した（『維新史』第一巻）。

「江戸湾岸防備図」によると、奉行は大八木熊五郎（大八木三郎右衛門『小倉市誌』下巻）であり、警護詰めの藩士は山崎利左衛門・林九六兵衛・緒方仙治郎であった。その後、小倉藩は安政六年（一八五九）から文久三年（一八六三）八月まで品川第五台場の警備を担当した（表5―35）。

和親条約にしたがって来日した下田駐在の初代総領事のハリスは、通商条約の締結を強く求めた。この条約交渉を担当した老中堀田正睦は、しきりに条約調印の勅許を朝廷に求めたが、朝廷では攘夷（外国を斥ける）の空気が強くて、条約の締結には至らなかった。このようなとき、安政五年（一八五八）に清国でアロー号事件が起き、ハリスはイギリス・フランスの脅威を説いて通商条約の調印を強く迫った。そこで、大老の井伊直弼は勅許が得られないまま、日米修好通商条約に調印した。この条約では神奈川・長崎・新潟・兵庫の開港と、江戸・大坂の開市がもりこまれていた。神奈川は宿駅であったので近接の横浜に変えられたが、横浜開港ののち下田は閉鎖された。兵庫は京都に近接した地であったためすぐには開港に至らなかった。その後、オランダ・ロシア・イギリス・フランスとも条約を結んだ（安政の五か国条約）。しかし、この条約は朝廷の勅許がなかったため朝廷と幕府が衝突し、井伊は強硬な態度をとって反対派の公家や大名を弾圧した（安政の大獄という）ため、万延元年（一八六〇）、暗殺されたが（桜田門外の変）、貿易が開始され、世界とつながる開国となった。ここに、尊王攘夷運動の

表5―35　江戸湾（台場）の警備

年代	西暦	月日	品川第一台場	品川第二台場	品川第三台場	御殿山下（品川第四）台場	品川第五台場	品川第六台場
嘉永6	1853	11.14	川越藩	会津藩	忍藩			
安政1	1854	11.16				鳥取藩	庄内藩	松代藩
安政6	1859	9.27		会津藩→姫路藩		鳥取藩→免除（大坂湾岸へ）	庄内藩→小倉藩	
万延1	1860	4.3				徳島藩		
文久1	1861	10.10		姫路藩→福井藩				福井藩
文久3	1863	8.15					小倉藩→松江藩	
		8.28			忍藩→高崎藩			
		10.21	川越藩→広島藩					
		10.22				徳島藩→水戸藩		
		12.4				水戸藩→中津藩		
		12.7				中津藩→笠間藩（非常警備）		
元治1	1864	2.15	広島藩→忍藩					
		5.16						福井藩→松代藩
		6.11			高崎藩→宇和島藩			
		8.17		福井藩→川越藩			松江藩→川越藩	
慶応2	1866	2.16						松代藩→高崎藩
		8.5						高崎藩→白河藩
		8.28				中津藩→山形藩		
慶応3	1867	3.13		前橋藩→二本松藩			前橋藩→佐倉藩	
		5.24		二本松藩→姫路藩				

（『國史大辞典』2　吉川弘文館出版より作成）

激化が始まるのである。

二　攘夷決行と小倉藩

攘夷をめぐる朝幕関係　安政五年（一八五八）、大老井伊直弼が勅許を得ないで日米修好通商条約を結び、更に反対勢力を弾圧した安政の大獄をおこした。その結果、これらに反対する攘夷運動が急速に高揚した。この攘夷運動は、京都の朝廷勢力を一大勢力におしあげることになった。万延元年（一八六〇）、桜田門外の変で井伊直弼が暗殺されると、久世広周・安藤信正が幕政を担当し、特に安藤信正は和宮降嫁を推進して公武合体運動を主導した。このため文久二年（一八六二）、安藤信正も尊攘派から襲撃されて重傷を負った。坂下門外の変という。

この年、幕府と朝廷との政治的力学関係が大きく変化した。島津久光は攘夷論者であったが、あくまでも幕政改革によって公武合体を実現する立場をとっていた。そして薩摩藩の尊攘派を弾圧（寺田屋事件）して、勅使大原重徳と下向した幕政改革を要求した。しかし寺田屋事件後は、京都ではかえって尊攘運動が盛んになった。その勢力は長州藩を中心とする尊攘派であった。朝廷もこの勢力におされ、朝廷は三条実美を勅使として江戸に派